【241】

氏　名（本籍）	齊藤具子（静岡県）
学位の種類	博　士（医　学）
学位記番号	博甲第 2681 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	医学研究科
学位論文題目	在宅高齢者におけるコンパニオンアニマルの飼育と手段的日常生活動作能力（IADL）及び尿中17-KS-S，17-OHCS値との関連

主　査	筑波大学教授	博士（医学）	大久保　一　郎
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	紙　屋　克　子
副　査	筑波大学教授	医学博士	中　谷　陽　二
副　査	筑波大学教授	医学博士	山　根　一　秀

論文の内容の要旨

（目的）

わが国は世界一の長寿国となっているが，高齢者が寝たきりの状態で数年を過ごし死を迎えることも少なくなく，65歳以上の寝たきり者の数は100万人余に及んでいる。このような点から言えば，平均寿命だけでは高齢者の健康状態の指標として不十分であり，手段的日常生活動作能力Instrumental ADL（IADL）はその指標となるとされている。一方，欧米を中心に，犬や猫などのペットが高齢者の健康に及ぼす影響についての研究が数多く行われ，「ペット（かわいがる動物）」から「コンパニオンアニマル（伴侶または仲間としての動物）」というように，ペットに対する見方が変化してきている。本研究では，在宅高齢者においてコンパニオンアニマル（ペット）の飼育が健康の維持に関連するかを，Ⅰの研究では，高齢者の健康度の指標である手段的日常生活動作能力（IADL）を指標に，Ⅱの研究では，ストレス負荷度やその適応能を表すとされる尿中17-KS-S，17-OHCS値を指標に検討した。

（対象と方法）

Ⅰの研究では茨城県里美村（人口約4,500）在住の65歳以上の高齢者1,345人のうち無作為抽出した400人を対象に1999年3月に自記式質問紙を用いて郵送法による調査を行った。IADL7項目について「IADL障害なし」「IADL障害あり」に分類し，IADL障害の有無を従属変数に，コンパニオンアニマルの飼育状況，コンパニオンアニマルに対する感情をそれぞれ独立変数に設定して，ロジスティック回帰分析を行った。

Ⅱの研究では，Ⅰの研究で回答のあった339人のうち，コンパニオンアニマルを飼育している者（以下：飼育者）13人，一度も飼育したことがない者（以下：非飼育者）9人，計22人を対象に早朝尿を採取し，17-KS-S，17-OHCSについて分析した。訪問の際Holmes and Raheの社会的再適応評定尺度によるこの1年間に起こったライフイベントと服用している薬について聴取を行った。また既往歴について研究Ⅰのデータと当日の面接により情報収集した。統計処理にはSASシステム（Version6）を使用した。

（結果）

Ⅰの研究の有効回答者数は，339人（84.8%）であった。高齢者のIADLに関連する要因としては，現在犬を飼

育している者の年齢・性を調整したオッズ比は，飼育経験がない者に比べ0.53（95％信頼区間＝0.27－0.99）であり，有意に関連していた。コンパニオンアニマルに対する感情との関連では「私にとってペットは親友だ」について「とてもあてはまる・あてはまる」と答えた者は0.48（95％信頼区間＝0.23－0.99）であり，有意に関連していた。「一日のうち少しでもペットにふれる者」は有意ではなかったものの関連する傾向がみられた。

Ⅱの研究では17-KS-Sに関しては，飼育者の平均と標準偏差は0.848±0.499（mg/g creatinine）〈以下単位同じ〉，非飼育者は0.816±0.637であった。17-OHCSに関しては，飼育者の平均と標準偏差は5.061±1.240であり，非飼育者は4.776±0.996であった。17-KS-S/17-OHCS（以下KS-S/OHCS）に関しては，飼育者の平均と標準偏差は0.192±0.154であり，非飼育者は0.176±0.152であった。17-KS-S値に関連する要因として高血圧症の標準偏回帰係数は－0.398と高く，17-OHCS値に関しては高血圧症は0.539と有意に高かった（$p < 0.05$）。KS-S/OHCS値に関しては－0.435と高い傾向にあった。

社会的再適応評定尺度では，「近親者を亡くす」，「本人の大きなケガや病気」の項目に該当する者が多く，飼育者の得点と標準偏差は48.07±45.79，非飼育者では24.67±30.23で，飼育者の方が高い傾向にあった。しかし，重回帰分析では，社会的再適応評定尺度のライフイベント得点は17-KS-S値，17-OHCS値，KS-S/OHCS値いずれとも関連していなかった。

高血圧症の影響を除いた偏相関係数は，飼育者においては17-KS-S値とKS-S/OHCS値間で0.943（$p < 0.01$），17-OHCS値とKS-S/OHCS値間では－0.622（$p < 0.05$）であった。非飼育者では17-KS-S値とKS-S/OHCS値でのみ0.982（$p < 0.001$）と有意であり，17-OHCS値とKS-S/OHCS値間には相関はみられなかった。

（考察）

Ⅰの研究で，高齢者のIADLとコンパニオンアニマルの飼育との関連を見ると，犬を飼育している者はIADLの障害がない割合が有意に大きかった。「日常的な接触」のある者は，IADLの障害がない割合が大きい傾向にあった。大きい傾向にあった。散歩をする，餌をやるなどのコンパニオンアニマルへの世話という接触が，IADLに関連していると思われた。コンパニオンアニマルに対する感情との関連では，「私にとってペットは親友だ」と答えて，ペットに対して好意的な感情をもっている者の方が，IADLの障害がない割合が有意に大きかった。実際にコンパニオンアニマルの世話をするというような身体的な面と情緒的な面の両方がIADLに関連しているように思われた。本研究は横断的データを用いたため，因果関係にまでは言及できなかった。

Ⅱの研究では，17-KS-S，17-OHCS，KS-S/OHCS値より，飼育者の方が非飼育者に比し，ストレス負荷度とストレス適応能が包括的生体反応に有意に関連していた。飼育者ではストレス負荷度が低ければ敏感に反応して，高い包括的生体反応に関連しており，非飼育者との違いがみられた。事例研究では，一人暮しの飼育者でコンパニオンアニマルとの強い結び付きがうかがえた。また，ストレス度の高い飼育者でも飼育している犬との交流により，良好な包括的生体反応の傾向がみられた。

審査の結果の要旨

本論文は茨城県里美村を調査地域とし，（1）コンパニオンアニマルの飼育状況と手段的日常生活動作能力（Instrument Activities of Daily Living：IADL）との関係，（2）コンパニオンアニマルの飼育状況とストレスとの関係（尿中17-KS-S，17-OHCS値を測定）を明らかにすることを目的とした2つの研究からなる。コンパニオンアニマルと人間の健康との関係に関する研究は欧米を中心に散見されるが，日本でほとんど実施されておらず，本論文は我が国における先駆的な研究である。結果としては，コンパニオンアニマルを飼育することが，高齢者のIADLを低下させない要因であること，またストレスの修復に効果的であることが示唆された。結果を一般化するには，調査地域が限定していることや調査対象数の問題等は若干あるものの，コンパニオンアニマルが高齢者の

健康維持に貢献することの可能性を示唆するものであり，急速に進行する高齢社会の健康対策におけるコンパニオンアニマルの役割の解明へ向けて，我が国において第一歩を踏み出す研究として，意義のあるものと評価できる。

よって，著者は博士（医学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。